The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Norbert Bolz, ”Die Konformisten des Andersseins : Ende der Kritik”
Author(s)	宮本, 真也
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 351-356
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8986
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Norbert Bolz

Die Konformisten des Andersseins -Ende der Kritik-

宮本真也

「批判理論は死んだ」-そうした見出しがＺｅｉｔ紙に掲載されたのは１９９９年９月９日のことであった。この秋はゲーテ生誕２５０周年だけではなく、社会研究所設立７５周年ということもあってフランクフルト大学近辺はにぎやかであった。いたる所で映画のポスターの横にフランクフルト社会研究所主催の国際会議（９月２３から２５日）のポスターを目にすることができた（その内容については研究所のサイトでも公開されている。http://www.rz.uni-frankfurt.de/ifs/）。７月にはユルゲン・ハーバマスの古希を祝うシンポジウムも開かれ、ドイツ国内に限らずアメリカ、イスラエルなどからも多くの講演者が訪れた。彼らのほとんどは、おそらくはこの書評が読まれる頃にはすでに公刊されているはずの彼の最新論集『真理と正当化』での議論に影響を及ぼした論客たちである。８月のアドルノの３０回目の命日にも各紙が彼の業績とその戦後ドイツに対する影響力について大きな論評を載せた。ハーバマスの古希記念シンポジウム、研究所設立７５周年に参加した印象からすれば、いわゆる批判理論とその周辺部分の知的生産力は健在で、日本における研究状況とのあいだにはあきらかに「時差」がある。それにもかかわらず、「批判理論は１９９９年９月２日に死んだ」という。

このＺｅｉｔの記事が巻き起こした「スローターダイク騒動」（それをメディアは「論争」と呼びたがるが、「騒動」、もしくは「スキャンダル」のほうがふさわしい）にはここでは詳しくは触れまい。筆者が右にあげた見出しにおいて強調したいことは、ミレニアムの最後の年に批判理論のアクチュアリティは、実に頻繁に吟味されて

いるということである。次のミレニアムに向けて、フランクフルト学派の批判理論を生かすべきか、あるいは葬り去るべきか。その審判をめぐる著作が1999年初夏からほぼ一月おきに3冊公刊された。公刊順にあげると、ノルベルト・ボルツ著『他在としての大勢順応主義者—批判の終焉』、C・アルブレヒト、G・C・ベーエマン、M・ボック、H・ホーマン、そしてF・H・テンブルックによる『知識人によるドイツ連邦共和国の設立—フランクフルト学派の作用影響史』、A・デミロヴィッチの大著『非体勢順応の知識人たち—批判理論のフランクフルト学派への展開』がそれらである。本稿で紹介するのは、フランクフルト学派の影響を受けた「批判意識の終焉」を掲げるN・ボルツの著作である。

ボルツについては多くを語る必要もないであろう。ドイツにおけるメディア論の旗手として日本でも注目を集め、特にヴァルター・ベンヤミンの美学をメディア論として（のみ）読み解く立場は一部の学者に理論的勇気を与えた。『批判理論の系譜学—両大戦間の哲学的過激主義』の翻訳書を通じて、日本の読者にとっても彼の出自は明らかになったことだろう。メディア論への転回以前に彼が取り組んでいたのは、ヘーゲル、マルクス、ルカーチの歴史哲学であり、アドルノの美学理論であった。1953年生まれのボルツもまたご多分に漏れずフランクフルト学派、特にその第一世代の影響圏にあったということである。また、批判理論の第一世代の思考に否定性のアポリアを見いだし、独自のスタイルで彼らから距離をとるという点では、ハーバマスとも共通している。ただ、ハーバマスが批判的社会理論のコミュニケーション論的転回という形で、ホルクハイマーとアドルノが抱え込んだ問題の「克服」をはかるのに対して、ボルツがリオタールがかつてやったように、ポスト構造主義とシステム理論を結びつけ、それをメディア論として構築していく手法はもはや「克服」というものではない。ハーバマスは自らの理論が示すように、「よりよき立論という穏やかな強制」の下で説明や議論、根拠付けを哲学的に試みる。それに対してボルツはこうした過程そのものが超越論的な理性の根拠付けであり、アポリアを越え出たことにならないと批判する。それゆえに、ボルツは自らの著作『他在としての大勢順応主義者—批判の終焉』において行っている作業を「説明」とは呼ばず、「観察」と呼ぶ。この「観察」概念がルーマンの社会システム理論に由来することは明らかだが、それではボルツにとって「批判」の代わりになるものとは一体何を指すのだろう。彼が「私は「社会において何がどうであるか」を「観察」し「記述」するのであって、「説明」や「解決」をするつもりはない」と言い切る以上、本著はそういう「説明」を期待することはできない。では、彼の「観察」、「記述」の正しさをはかるものは何であって、彼が自らの「観察」、「記述」でもって、なにがしかの論拠や言説に改訂を迫るさいに決定的な役割を担うものは何なのであろう。ボルツとの対話に対し、この「決定的な役割を担うもの」を「論拠」と呼べないところに彼の戦略がある。「決定的な役割を担うもの」自体を口にすることそのものを彼は拒否するのだろうが。

本書は4つのエッセイからなっており、それぞれ「批判という装

飾」、「意味社会の幻影」、「パトスからナンセンスへ」、「レトリックの回帰」と題されている。社会学的にみても西洋の現代社会が機能的分化が極限に達していることは自明である。しかし、この事実は逆に人々のあいだに「意味」や「全体」というものに対する憧れを生じさせる。これらのものを人々は「私」と「共同体」という「本質（的に見えるもの）」の幻影の中に見いだし、今やわれわれの文化は親密性と協調といったものに支配されているのである。「暖かいもの」に人々は飢えているというわけである。そこでボルツによればこの傾向は一種の宗教として、二つの方向に分かれる。そして人々は一方では現状肯定的に市場でのカルトに、他方では体勢批判的として抵抗運動に向かうわけである。なるほどモードと反抗には共に、そこに関わるもののあいだだけで何かを共有してお互いのつながりを確認しあうと同時に、既存のものに異を唱えるという傾向がある。そしてそれに参加することが救いのためのミサとなるわけである。こうした否定にとってのみ、分化しているはずの社会もまた全体として現れる。

ではそこで本書の副題でもある「批判の終焉」はいかに訪れるのだろう？現代の批判的精神をめぐる状況を論じるさいにボルツは、68年世代の学生運動からその傾向を読みとる。ルーマンの言葉を借りて、ボルツは68年世代の抵抗の形を「ストレンジ・ループ」と呼ぶ。つまり、68年世代の運動はまるで外部から批判が行われたように「社会の中で、社会のために、社会に対して」抵抗を行うというパラドクスを展開したさきがけであったと彼は言う。社会の外部に批判のためにアルキメデスの点を保持する、それはまさに否定弁証法的な魔法である。抵抗を行うときにすでに抵抗のリハーサルは終わっていて、デモに参加しているさいにはすでに自己演出したとおりに振る舞えばいい。テレビ時代のデモとマス・メディアのあいだのフィードバック関係である。社会運動が社会問題を作るというわけだ。また、ここで68年世代が批判の対象として全体としての社会を前提にできた「幸運」にもボルツは注意を払う。何よりも当時大学にはナチと結びついていた人物が指導力を持っていた。ファシズムへの転化の懸念は残っていたし、官僚国家の権威構造を大学に見いだすことはたやすかった。マルキシズムと精神分析のコンセプトを用いた文化産業（アドルノ）、意識産業（エンツェンスベルガー）が彼らに受けいれられたのはそういう事情があったとボルツは見る。彼らは資本主義社会の「危機」という言葉で、現代社会の複雑性を単純化し、政治的に問題化することができた。しかし、現在の文化の状況はマスメディアの発展に伴うフィードバック・メカニズムの大規模な普及によって大きく様変わりしてしまっている。二階のサイバネティクスを人々はテレビというメディアを通じてすでに身につけているのだ。ニュースは出来事を伝えるのではなく、他者が重要と思うことを伝えるのである。マスメディアは出来事を観察するのではなく、観察者（視聴者）を観察するのだ。抵抗もまた認知をめぐる闘争としてのマーケティングを必要とする。そしてメディア時代の定言命法が人々の統制原理となる。すなわち、「他者が接続可能であるように、コミュニケーションを行え」。こういう原

理に従っていたなら『否定弁証法』（アドルノ）、『一次元的人間』（マルクーゼ）は、学生運動のための抵抗のバイブルにはなりえなかったはずである。68年世代の態度をボルツは反権威、反米、非体勢順応主義という3つのキーワードで表現する。この最後の非体勢順応主義こそにボルツは批判的意識が単なる飾り物に転化する原因に他ならない。すなわち、順応への闘争において順応能力、学習能力は次第に萎え、自己反省能力を喪失する。そして仮に68年世代の非体勢順応主義が今日において自らを「自己批判的」であると名のるならば、それは体勢順応的であるものが批判のカモフラージュをしているさまにすぎないのである。

そこで批判的意識が自己批判として形をとればどういう方向を取るのだろう。ボルツが示すのは社会の複雑性問題である。すなわち批判理論から離反し、それでも真に批判的であろうとすれば残る道はシステム理論しかない。社会の外部に批判の試金石をおくような批判のアポリアは体勢順応に転化し、ボルツによれば自明で、自己否定としての批判だけが批判としては可能なのである。この否定はまたはシステムのフレキシビリティにとって都合よく機能する。つまり社会の否定が社会そのものに導入されることで、批判に対して社会には免疫が構成されるようになる。システムの複雑性が高まり、次の段階への進化の契機として否定と批判は用いられるのである。

フランクフルト学派はボルツによればネオ・マルキシズムの語彙で革命をめぐる討議のための意味論を保持する役割を担ってきたが、この意味論がどうしようもなく古ぼけてしまったので、理論のつじつまの合わないところを世界の矛盾として投影せざるをえない。68年世代の運動においてマルキシズムは社会による社会の救済のための宗教として魅力を放ち、学生の抵抗は社会的礼拝として演出された。知識人の活動の理想的な場所もかつては新聞の文芸欄であったが、今では一種のショービジネスとなっているのである。ボルツは左派文化人、知識人に提案する。彼らはビジネスへの転身をはからないといけない。彼らのウリPositivitätは否定性Negativitätなのだ。そして、その技術的な無能さは哲学的思慮深さとして整えないといけない。そうして彼らの否定性に感化された批判的意識が他者を「現状肯定的」と記述するとき、そこでは自分自身は「批判的」なものとして現れている。しかしそこでの「批判的」と「現状肯定的」のあいだにどのような違いがあるのかには、まったく「無批判的」である。そこに批判的意識の盲点があるのだ。こうした態度には一種の特権意識もまた働いている。こうした批判的態度は「自分は他者と違うものである」という傲慢さや願望を表しているにほかならず、背後に体勢順応主義を隠蔽しているのである。

こうしたボルツによる記述は、実に幅広い社会理論と人文科学の知識とポップ・カルチャーやマルチメディア関連の素敵な語彙を散りばめて綴られており、軽やかである。『批判理論の系譜学』でナチに関わった人物たちの思想を、その事実に触れずに取り上げるという掟破りをやったように、本著においてもまた彼は一つの掟破りを試みている。それはドイツ連邦共和国の客観的精神の一部となっている批判理論の有効性に無効宣告を行うというものに他ならない。

しかし、「批判ではなく観察を」というとおりに彼のここでの叙述は論拠に乏しい。エッセイという形式を取る以上仕方がないことなのかもしれないが。しかし、特にボルツがアドルノの『否定弁証法』をして「社会に対する外部からの批判」と断じるさいにはさらに慎重な態度を取るべきであったように思える。つまり、ここでは少なくとも以下の3つの問いに対してボルツは詳細に議論するべきであったように思える。

1. アドルノの社会-文化批判は外部からの、もしくは外部に批判の基準をおく批判なのか?
2. 外部に批判の基準をおく批判は果たして無効なのか?
3. 批判理論は68年世代に自己批判を教えなかったのか?

1と2の問いについては昨今の社会批判の有効性をめぐるR・ローティーやM・ウォルツァーの議論が示唆的で、何よりもフランクフルトでも今なお議論されているテーマである。批判理論の規範的基礎付けの問題をアポリアの入り口として拒否する彼のスタイルが、このテーゼを無根拠に立てることを正当化できるとは考えられない。3に関してはボルツの記述には裏付けるものが一切ない。確かに「批判的」と「現状肯定的」の二分法をまったく「無批判的」に受けいれることは、自己批判能力の欠如の証左ともなりうるが、68年世代が事実そうであったのかどうかをボルツはどう確証できるのだろうか。こういう問いを前もって禁じる戦略をボルツがとっているなら、問いを立てること自体無駄ではあるのだが。ボルツの叙述に魅力があるとすれば、それは真理性への問いが残るにもかかわらず、批判的精神が陥るかもしれない、あるいはすでに陥っているかもしれない罠を臆せず指摘しているという点であろう。論拠や実証的裏付けを云々しているうちに崩壊が到来してしまう前に、彼の声に耳を傾けることは無駄とは思えない。

では、「批判理論は死んだ」のか?それはボルツが指摘するままに滅びの道をたどっているとは思えない。ただ、ボルツが指摘したように市民の日常的な生活実践における批判的意識との関連において批判理論が意味を失ったときにその終わりは始まる。すなわち一方で市民が生活において批判的精神を温存しているのであれ、コミュニケーションを遮断して孤立化の度合いを高め、他方で批判理論が「実践」から「理論」へと退行したときに、批判理論はそのアクチュアリティを失うのだろう。

Norbert Bolz, Die Konformisten des Andersseins -Ende der Kritik-, München, 1999
Jürgen Habermas, Wahrheit und Rechtfertigung, Frankfurt am Main, 1999
Clemens Albrecht, Günter C. Behrmann, Michael Bock, Harald Homann, Friedrich H. Tenbruck, Die intellektuelle Gründung der Bundesrepublik Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule,

Frankfurt am Main/New York, 1999
Alex Demirović, Der nonkonformistische Intellektuelle Die Entwicklung der Kritischen Theorie zur Frankfurter Schule, Frankfurt am Main, 1999